守前県議会議長のほか、47年前の岐阜国体の炬火リレー参加者9人が走者に。藤墳和義さん(70)=同町表佐=は「2回も経験できて光栄」と話していた。

同町役場で行われた歓迎式では、中川満也町長が「国体まであと30日。多くの人を温かく迎え、成功させましょう」とあいさつ。子どもらが表佐太鼓やミナモダンスを披露した。

31日は関ケ原町で炬火リレーが行われる。

（有我友香理）

素描

佐藤一斎

山内ホスピタル理事長兼院長　山内英通

江戸時代、現在の岐阜県恵那市岩村町に岩村藩という二万石の小さな藩があった。その家老職に佐藤一斎という人物がいた。一斎は藩の家老でありながら、神田湯島の昌平坂学問所（現在の湯島聖堂）の塾長になり、その後総長になった人物である。彼はこの学問所で幕府高官の子弟に朱子学を教えていた。その弟子には、山田方谷、渡辺崋山、佐久間象山、横井小楠等きら星の如く優れた人々がいた。佐久間象山の門下には、勝海舟・坂本龍馬・吉田松陰・橋本左門、さらにその松陰の門下には高杉晋作・久坂玄瑞・木戸孝允・伊藤博文・山縣有朋と繋がる。

一斎には言志録、言志後録、言志晩録、言志耋録という4冊の著書があり、それらを総称して言志四録という。彼は著書の中でその心のうちを伝え、人間としていかに生きるかを示している。彼の言葉で私の気に入っている言葉には次のようなものがある。「春風をもって人に接し秋霜をもって自ら粛しむ。人には易しい仕事を与え、自分は難しい仕事を受け持つ。暗い所にいる人は明るい所がよく見えるが、明るい所にいる人は暗い所の様子がよく見えない。三学戒：少くして学べば則ち壮にして為す。壮にして学べば則ち老いて衰えず、老いて学べば則ち死して朽ちず」西郷隆盛は一斎の信奉者であり、座右の銘として一斎の文章を抜粋し人生の指針とした「南州手抄言志録」を記した。一斎の孫娘・吉田士子は吉田茂の養母であり、茂は士子に厳しく育てられたそうである。彼は第二次大戦後の第45・48～51代首相で、自由党を率いて日本の戦後復興を成し遂げた大政治家である。

◇…素　描…◇

9月と10月の執筆者

【月曜日】小林　俊彦氏（岐阜地方気象台長）

【火曜日】石河　恒夫氏（県畳組合理事長）

【水曜日】安藤　志郎氏（美濃加茂国際交流協会事務局長）

【木曜日】宇佐美晃三氏（大野町長）

【金曜日】山本　卓司氏（野村證券岐阜支店長）

【土曜日】岩井　慶次氏（恵那市防災研究会長）

【日曜日】小林　隆徳氏（高山西高校副校長）